さんにち NIE ワークシート

山梨日日新聞

年　　組　名前：

古賀（こが）　稔彦（としひこ）さん（五輪柔道金メダリスト）

死に場所 畳に求める

1992年夏の奇跡は、華のある柔道家がスターの輝きで生んだ。当時日本男子監督で上村春樹・講道館館長は「この世に神様はいないのかと思ったら、やっぱりいた。稔彦の執念だ」と話す。

バルセロナ五輪開幕直前、現地で吉田秀彦選手との練習中に左膝を負傷。実戦的な乱取りで最後の一本だった。指導陣は滑りやすい畳を不安視していた。全治1カ月以上の重傷で出場すら危ぶまれる中、「平成の三四郎」は奮い立つ。「人生は諦めたら全て終わりだから」と後に打ち明けた。

試合当日は5本の痛み止め注射を午前と午後に2度も打った。準決勝では痛む左足を軸にし、魂の全てをぶつけるような一本背負い投げで一本勝ち。旗判定で制した決勝後、畳の上で全身を震わせる姿はまぶしかった。

佐賀県出身で2歳年上の兄、元博さんを追って中学入学と同時に上京し、柔道私塾「講道学舎」に飛び込む。「生きるか死ぬかの覚悟を決めた」日々は「一生精進、常に前進」の信条を生み、2000年の現役引退後は女子代表など後進の指導や競技普及に走り続けた。講演は一昨年まで年間約150回もこなした。

昨年春に異変を感じ、がんが判明した腎臓を5月に一つ摘出する。今年2月ごろから体調が悪化し、声もかすれた。最後は体重が30㌔近くも減って57㌔。母や兄にすら病の事実を告げなかったのは「バルセロナと同じ。絶対に勝つと。だから周りに言わなかったんだ」と親しい知人は察する。

20年以上もマネジメントを務めた古屋博史氏によると、03年に道場「古賀塾」を川崎市内の自宅に設立した真の目的は「自分の死に場所を畳の上で作るため」だった。柔道一直線に生きた男は命を懸けた畳で眠り、数々の栄光とドラマに満ちた歩みに幕を下ろした。3月24日、53歳で死去。

（共同通信　田井弘幸）

（2021 年 5 月 26 日付 山梨日日新聞 9 面）

問1「一生精進、常に前進」を信条として活躍した柔道家の古賀稔彦さんは、何という異名で呼ばれていましたか。正しいものに〇を付けてください。

「　　」昭和の風雲児　　「　　」不世出の天才柔道家　　「　　」平成の三四郎

問2 1992 年夏のバルセロナ五輪で古賀さんが起こした奇跡とはどのような奇跡ですか。80 字～100 字で書いてください。（句読点も含めます）

問3 あなたなら、この記事にどんな見出しを付けますか。

「　　」

教育目的以外の無断転載 複製および頒布は禁止します
Copyright © 2021 山梨日日新聞社 THE YAMANASHI NICHINICHI SHIMBUN.